

## アメリカの伝記と神話

——ホレイシヨ・アルジャーの場合——

大 井 浩 二

ホレイシヨ・アルジャー（一八三二—一九九）が『ボロ着のディック』（一八六七）によって代表される成功物語を百編以上も書いた大衆作家であることは、あらためて指摘するまでもあるまい。とくに年若い読者を対象とした作品を発表して、何百万部も売ったと言われている彼の名前を、アメリカ大衆文化と切りはなして考えることは不可能にちがいない。しかも、彼の著作に共通する主題は、「ボロから富へ」という成功の夢とふかく関わっていると考えられているが、彼自身の生涯は、どうやら挫折とフラストレーションの連続であつたらしい。成功者の代名詞となつた「アルジャー的ヒーロー」の生みの親が、じつはみじめな失敗者であつたというのは、いかにもアイロニカルな事態にほかならなかつた。

ところが、まことに奇妙なことに、そのような興味ぶかい人物に関する正確な伝記、『ホレイシヨ・アルジャーの失われた生涯』が二人の研究者によつて完成されたのは、つい最近の一九八五年のことであつた。死後九十年近くたつて、ようやく決定版の伝記が書かれたというのは、アルジャーの名前が広く知れわたっているだけに、奇妙この上ない現象といえよう。もちろん、それ以前に彼の伝記が一冊もなかったというのではない。それどころか、数冊に

のぼる書物が出版されているけれども、どれもこれも不正確であって、誤解や曲解、さらには勝手な虚構までもあふれている作品ばかりであった。それらはいずれも伝記と呼ばれるに値しないものであったと断言していい。生前、アルジャー自身、「本当のところ、ぼくは自分の伝記にほとんど何の興味ももっていない」と語っていたけれども、長いあいだ正確な伝記が書かれなかったのは、やはり異常としかいいようがあるまい。

ホレイシヨ・アルジャーは、ハーヴァード大学を卒業したあと、ケンブリッジ神学校で学び、父親と同じ牧師の道を歩みはじめる。一八六四年二月から六六年三月にかけて、マサチューセッツ州ブルースターの教会で牧師をしていたが、三十四歳のとき、ある不幸な事件が発生する。彼が教会の「男の子との不自然な親密さ」という言語道断の嫌悪すべき犯罪」を犯していたことが判明して、牧師のポストにとどまることができなくなり、ひそかにニューヨークへ出奔することを余儀なくされるのである。この同性愛という過去のいまわしい事件を隠しとおすために、アルジャーは詮索好きな伝記作家の目を意識しつつける。彼が自分の伝記に「興味をもっていない」のも当然であったし、彼の死後、遺書の指示にしたがって、妹のオーガスタは、彼に関する伝記的資料を一切破棄してしまう。一族のほかの者たちも同様の措置をとることになったため、アルジャー個人にまつわる資料はほとんどすべて失われ、それが後世の伝記作者たちを悩ませつつけることになったのである。

アルジャーの最初の伝記、『アルジャー——ヒーローのいない伝記』（一九二八）を書いたのは、ハーバート・R・メイズ（一九〇〇—）であった<sup>(9)</sup>。彼はのちに『グッド・ハウスキーピング』の編集にたずさわったり、『サタデー・レビュー』にも関係したりしたあと、一九六一年から六五年にかけてはマッコール社の社長になったりする一流のジャーナリストで、一九六〇年にはその年度の優秀雑誌編集者、「マガジン・エディター・オブ・ザ・イヤー」に選ばれたこともある。だが、一九二七年、まだ駆け出しの編集者として、『アメリカン・ドラギスト』という医薬雑誌で働いていた彼は、とくに「アルジャー愛好家」というわけでもなかったけれども、当時、成功物語の作者として

文名が高まっていたアルジャーの伝記を書くことを思いつく。早速、用意に取りかかって、生前のアルジャーを知っていた人物にインタビューしたり、何人かの人びとに手紙を書いたりするが、一向に材料が集まらない。こんな作家は伝記を書くに値しないではないか、という結論に達して、一、二の友人に相談すると、はじめからアルジャーの伝記の「テイク・オフ」、つまりパロディを書けばいいではないか、とそそのかされる。なるほど、それならリサーチの必要もなければ、時間もかからない、というわけで、メイズは、この話を新興出版社の社長ジョージ・メイシーにもちかける。最初、あまり気乗りのしなかったメイシーも、メイズがまとめた冒頭の数章を読んで、「満足したばかりでなく、大喜びをしていた」とメイズは語っている。こうして、メイズは出版社と共謀の上で、まったく根も葉もないアルジャー伝を書くという計画に取りかかるのである。

そもそもメイズがパロディ的な伝記の執筆を思いついた背景には、一九二〇年代から三〇年代にかけて偶像破壊的な伝記が流行していたという事情が働いていた。そうした流行について、メイズ自身も「それは、かつて有名であった人びとに関する正体暴露的な本が何冊も書かれ、作者たちが対象を矮小化したり、名誉を傷つけたりする時代であった」と説明している。この種の伝記作者の代表は、いうまでもなく、リットン・ストレイチーであったし、メイズが名前をあげているW・E・ウッドワードのジョージ・ワシントン伝は、「正体暴露的」な傾向をはっきりと示していた<sup>(6)</sup>。したがって、一九二八年に刊行された『アルジャー——ヒーローのいない伝記』は、そうした流行に悪ノリして、読者に一杯食わせてやろうという目的で書かれた作品であったのである。

ともあれ、メイズが一気に書きあげた本は、出版後五十年たった一九七八年になって著者自身が認めているように、「これっぽちも事実に基づいていない、周到かつ完璧な作りもの」であった。そこに「真実の言葉」が見出されたとすれば、それは「こちらが気づかないうちに入りこんだものだった。わたしはそれをまったくの無から生じさせた。わたしが発見したわずかな事実のほとんどは、故意にねじ曲げられた」とも書かれている。この本には、アルジ

ヤーの日記からふんだんに引用されているが、そのような日記ははじめから存在していなかった。「アルジャーが日記をつけていたとしても、そんなものは何も知らなかった。いずれにせよ、その日記をでっち上げるほうが楽しかった」とメイズは告白している。

たとえば、大学四年生のアルジャーは、文学者になるべきか、牧師になるべきかと悩むが、その頃の「日記」から、つぎのような引用がなされている——『「白鯨」を読んで、興奮させられてしまう。文学者の生活はすばらしいスリルに満ちているにちがいない！想像と観察——これをぼくは重要な必須条件と考える。ぼくが創作にライフワークとして取り組むことは望ましいだろうか？』たしかに、『「白鯨」を読んでいるアルジャーというメイズの思いつきはすばらしいけれども、そこには一九二三年の『ビリー・バッド』の出版を契機として、にわかの高まってきたメルヴィル再評価の動きが反映しているにちがいない。メイズはまた、「わたしは、いつか書くことになる偉大なアメリカ小説を、アルジャーに夢みさせた」と告白しているが、ここで彼がJ・W・デフォレスト以来の「偉大なアメリカ小説」という概念をもち出したのは、「伝記」の前年の一九二七年に、イデイス・ウォートンが同題のエッセイを『イエール・レビュー』に発表しているのを知っていたためかもしれない。

いずれにせよ、この種のでっち上げは、この本のいたる所に見うけられる。アルジャーの父親を、きわめてビュリタンの厳格な人間に仕立てあげたり、アルジャーに言語障害（どもり癖）があったと書いたり、あるいは友人から「聖人ホレイショ」という仇名を奉られていたことをつけ加えたりするなど、メイズの想像力はとどまる所を知らない。巻末にアルジャーの作品のリストをつけ、「二年間にわたって、わたしが突きとめることができた本は、すべて含まれている」と、まことしやかに書き加えながら、実際には出版されてもいない本を十四冊も記載している。とにかく、すべてが事実無根としか呼べない「伝記」であって、著者のいうとおり、「そのすべてがまったくのファンタジーであった」のである。

ところが、これまた意外なことに、メイズの本の真偽を問う者は、ただの一人もいなかった。著者も出版社主も、ともにまことに見事な“literary hoax”の誕生をことほぎ、読者から拍手喝采されることを期待していた。にもかかわらず、この「伝記」は「真正銘の伝記」、「アルジャーの生涯に関する本当の物語」とみなされてしまう。「まったくのファンタジー」が「事実」として受け取られたばかりでなく、書評もまた、概してきわめて好意的であった。ハリー・ハンセンは「うっとりさせられる」という最上級に近い形容詞で賞賛し、「見逃してはならない」一冊にあげている。じつをいうと、やがてハンセンはメイズの親友となり、せっかく激賞してくれた友人を傷つけないという気持ちから、メイズはそれがインチキな作品であることを告白できなくなってしまった、とのちに語っている。たしかに、マーク・ヴァン・ドールンはメイズの本を「薄っぺらで、つまらない代物」と呼んでいたが、アラン・ネヴィンズは、そこに将来利用できる「事実」が集められていることを認めていたし、マルコム・カウリーも「この種の平均的な作品よりすこしは良い」と評価したあと、「それはかなりオリジナルなリサーチを集約している」と述べている。このほかにも著者のユーモアや洞察を褒める書評や、彼を「もっとも驚くべき伝記作者の一人」に数えあげた書評もあった。なかにはメイズが「二流のボキャブラリー」しかもたず、アルジャーに関して「知られている、わずかな事実」に「五流の想像力」を働かせている、ときめつけた書評(E・H・ブランチャード)があったりして、すべての「事実」をでっち上げるために最大級の「想像力」を発揮した著者をとまどわせたらしい<sup>(4)</sup>。

こうして、『アルジャー——ヒーローのいない伝記』に書きこまれた「事実」は、その後の伝記作者たちによって忠実に引きつがれることになる。一九六三年に『ボロから富へ——ホレイショ・アルジャーとアメリカの夢』<sup>(5)</sup>と題する新しい伝記を発表したジョン・テベルも、そうした伝記作者の一人であった。彼はニューヨーク大学ジャーナリズム学料の主任教授で、ほかに五冊の伝記、三冊の歴史書、それに七冊の小説その他を書いているが、この本につけた序文のなかで、メイズの「伝記」を大いに褒めあげ、彼が二十八歳のときにおこなった「リサーチ」は、四十年ば

かりたつた現在でも通用する、と語っている。また、「当時は生存していて、いまは亡くなったアルジャーの家族や友人の回想を利用した」メイズをテベルは高く評価して、「そうした資料に関するメイズ氏のリサーチは決定的であつて、わたしは本書の伝記に関する部分では、それに自由に準拠した」ことを認めてさえている。当然の結果として、彼の本にはメイズのいう「事実」が何一つ変えることなく利用されているのである。

ほぼ同じことは、それから十五年後の一九七八年に出版されたR・D・ガードナーの『ホレイショ・アルジャー、あるいはアメリカン・ヒーローの時代』<sup>6)</sup>についても言えよう。この本はもとと一九六四年の出版であるが、新版においてもまた、不正確な「事実」が随所に散りばめられている。いや、その本に序文を寄せるように求められたメイズ自身が、自分の書いた「伝記」とガードナーのそれとのあいだに数多くの「類似点」を見つけ出し、後者を「フィクション」ときめつけているのである。五十年まえに「まったくのファンタジー」をものした人物から、「フィクション」呼ばわりをされている本の内容について、ここであらためて紹介するまでもあるまい。アルジャーの伝記はいずれも、一九八五年の決定版が出版されるまで、メイズの「事実」か「フィクション」から成り立っていたといつても過言ではない。

当然のことながら、メイズの書物が流した害毒は、百科事典の類にまで及んでいる。先程のテベルが『アメリカ伝記辞典』に書いたアルジャーの項が、メイズの「伝記」に基づいていることは容易に推察できるし、ケネス・リンとH・H・ワゴナーがそれぞれ『ブリタニカ百科事典』と『コリヤーズ百科事典』に寄稿した文章も、メイズのでっち上げた「事実」をそのまま利用している。これらの三人の著名な学者の文章がいずれも一九七四年の版に掲載されていることは、やはり驚くべき事実であると言わねばなるまい。また、メイズの「伝記」における「事実」に基づいてアルジャーに精神的な解釈を試みた研究者、たとえばケネス・リンやノーマン・ホーランドの場合、そこで得られた結論は、一体どこまで信頼することができるのだろうか。アルジャー研究家のジャック・ペイルズは、ある権

威のある雑誌で、メイズの書物がまったくの“hoax”であることを論じたにもかかわらず、その雑誌の別の号に、いぜんとしてメイズに準拠して展開したアルジャー論が発表されていた、というエピソードを紹介している<sup>(9)</sup>。この笑えぬ喜劇は、一九二八年の「伝記」がいかにも一般に受け入れられているかを、何よりも雄弁に物語っている。

さすがに慧眼の批評家マルコム・カウリーは、一九二八年の書評でメイズの「オリジナルなりサーチ」に言及したあと、「黒い、布装の本」とメイズが呼んでいる例の日記の存在について疑問を抱きはじめてらしい。一九四五年に発表した文章のなかで、「日記は、メイズが使つて以来、姿を消してしまい、それを見たことを覚えてゐる者は、ほかに誰もいない」と述べている。このカウリーの疑問に答える手紙を、メイズは一九五八年になってやっと書き送るが、そこでもやはり「わたしの本の信憑性」を証明しようとしている。あくまでもシラを切りとおす彼にうまく言いくるめられたのか、カウリーは一九七〇年に書いた一文のなかで、メイズの本が「アルジャーに関して入手できる最良の伝記」であることを認めるにいたる。メイズ自身は、その手紙について反省しているけれども、結果的にはカウリーのお墨付きを貰うことになったのである。

こうみてくると、『アルジャー——ヒーローのいない伝記』は、まことに巧妙に仕組まれた、じつに罪ぶかいパロディであつたと言わざるを得ない。だが、それにしても、この本が半世紀ものあいだ、ずっと読みつづけられてきたのはなぜか。嘘で塗り固められているとはいへ、やはりそこには、アメリカ人の読者が信じたいと思うような「事実」がアルジャーに関して書きとめられていたからではないだろうか。「まったくのファンタジー」であることをはっきりと認めた上で、あえてこの本のアメリカ的性格とでもいふべきものを分析してみることになしたい。

この本には、アルジャーをめぐる何人かの架空の女性が登場している。彼はまず、友人アレグサンダー・チャップマン（これまた実在しない人物である）のいところであるペイシエンス・スタイアズと出会い、やがて二人は愛し合うようになる。当時、アルジャーはハーヴァードの学生で、十七歳。ペイシエンスはすこし年下であつた。例の捏造さ

れた「日記」の、一八四九年一〇月四日の項には、「彼女は感じのいい女性だ。黄色いボンネットをかぶっていた。目はハシバミ色で、悲しそうだった」と、最初の印象が書かれている。一週間も経たないうちに、「ペイシエンスにはえくぼがあり、歯は雪のように白い。レクシー（アレグサンダー）は彼女が好きだ。ぼくも彼女が好きだ。明日、三人で散歩しよう」とか、「ペイシエンスはラテン語がよくできる。ほっそりとして、愛らしくて、午後、歌の勉強がしたい、と教えてくれた。いまでも上手に歌えると思う」とかいった言葉が「日記」に書きつけられるようになる。

ほどなくして二人は結婚の約束をするにいたり、おたがいの母親の了承を取りつける。だが、アルジャーの父親は、年若い息子の結婚に猛烈に反対する。「ぼくはペイシエンス・スタイアズと結婚する決心をしました」というアルジャーの手紙（これももちろん、実際には書かれなかった手紙である）を受け取ると、父親はケンブリッジに駆けつけて、「神に対する義務」を息子に説き聞かせ、若すぎる結婚を断念させようとする。結局、父親の言葉に従うことになったアルジャーは、「あなたが貧しい生活に満足して下さるというのなら、父の不興にも耐える用意があります」とペイシエンスに書き送る。だが、結婚を思い切らねばならぬことを悟った彼女は、いかにもニューイングランド的な「忍耐」という名前が暗示するように、彼のまえからひっそりと姿を消してしまう。三十年後、死の床にあるペイシエンスを見舞った父親からの手紙を受けとったアルジャーは、すぐさま汽車にとび乗って、かつての恋人のもとに駆けつける——といった具合に、「忍耐」という美德をもった女性との恋愛は終りを迎えることになるのである。

他方、アルジャーは一八六〇年にヨーロッパ旅行に出かけるが（この旅行は実際にあったことである）、パリのカフェの歌い手エリーズ・モンスレという女性に出会い、すっかり夢中になってしまう。「驚くべき早さで、ホレイシヨ・アルジャーは道徳的なためらいとの闘いをやめてしまった」とメイズが書いているように、やがて彼は、この素性のよくわからない女性と肉体関係をもつにいたる。初体験のあとに書かれた二月四日付の「日記」には、「こんな



に長く待っていたばかりは馬鹿だった。あれはぼくが思っていたほど邪悪なことではない」と書き記し、さらに「ぼくは彼女からいろいろなことを教わっている」(六日)とか、「このままつづけていいのか。これは正しいことなのか。なぜ悪いことなのか。彼女もほかのだれも、悪いことと思っていない。思っているのはぼくだけだ」(七日)とかいった言葉がつづく。「眠られないいく夜かのもと、彼はこうして闘いをやめた。エリーズが勝った。彼は主義よりも彼女の肉体を優先させた。彼の敗北は決定的であった」とメイズは書いている。

やがてエリーズと別れたアルジャーは、シャロット・エヴァンズというイギリス娘と交渉をもちはじめた。フランス女のエリーズよりも世間ずれのした画学生のシャロットは、アルジャーに「精神的な苦痛」を味わわせることになり、「シャロットの手管」に抗し切れなくなつた彼は、一度は逃げ出そうとするが、荒れ狂う彼女のまえになす術さえも知らない。メイズの言葉を借りると、「彼女の支配のもとで、アルジャーの力は急速になえていった。……捨てたためらいがまた戻ってきて、彼を苦しめた」ということになる。こうして、アルジャーは女性遍歴を重ね、かつての「聖人ホレイショ」の面影は消えてしまふが、やがて届いた母親からのやさしい手紙で、やっと迷いから覚めた彼は、アメリカに帰ることを決心する。シャロットもニューヨークまでついてくるが、口実をもうけた彼は、うまく姿をくらましてしまう。

久し振りに帰国した放蕩息子を出迎えてくれた故郷のマサチューセッツは、「天国のように思われはじめた」とメイズは説明している。かつて「忍耐」という名前の恋人がいただけでなく、いままた「情愛とやさしさ」にあふれた母親が待ちわびている「天国」としてのアメリカ。それは、誘惑と危険がいっぱいの、悪の華としてのヨーロッパとあざやかなコントラストをなしている。この無垢と経験のコントラストは、チャールズ・サンフォードのいわゆる「エデン的コントラスト」と呼んでいいし、D・W・ノーブルの指摘する「二つの世界のメタファー」を、そこに読みとることもできる<sup>(9)</sup>。いずれにしても、この捏造されたアルジャーの女性関係から浮かびあがってくるのは、「天

国」としてのアメリカと「地獄」としてのヨーロッパという、アメリカ人好みの、あるいはきわめてヘンリー・ジェイムズ的な国際状況ではないだろうか。メイズの「伝記」は、アメリカを例外とみなす神話の上に成り立っていると言い切ってもよいだろう。

この本によると、アルジャーはまた、ニューワークの商人G・N・マヴェリックという人物と協力して、ニューヨークのパドローネ制度に挑戦し、それを廃止に追いやったとされている。このパドローネ制度というのは、子供に乞食やバイオリン弾きなどをさせて酷使するイタリア人の親方の制度であるが、その残酷さ、非人間性をまず暴露したのがマヴェリックというわけで、「旗を挙げたのはマヴェリック、それを振ったのはアルジャーであった」とメイズは書いている。ともあれ、パドローネ制度追放のキャンペーンに立ちあがったマヴェリックが人気作家のアルジャーに援助を求めてくると、「虚栄心をくすぐられて、アルジャーはすぐさま行動に移ることを約束した」とも書かれている。彼は本来の作家業をそっちのけにして、この社会改良運動に取り組むことになり、第一回の抗議集会を開くまでに漕ぎつけると、その後は毎週のように公園やホールで「ときの声」がながるようになる。

こうしたアルジャーの積極的な活躍ぶりに、パドローネたちは警戒の色を強め、彼に脅迫状を送りつけたり、暴力行為に出ることさえも辞さなくなる。ある時など、「彼の頭ははげしく殴打され、ナイフも引き抜かれた」が、折よく到着した警官によって助けられるという一幕もあった。それ以来、「彼は自衛のためにピストルを所持するようになった」とメイズは述べている。度重なるいやがらせや脅迫にもめげずに運動をつづけ、ついに勝利をおさめたアルジャーについて、メイズは「たしかに、そのときのアルジャーは戦闘的であった。この男はまた勇氣にも欠けていなかった。彼の戦果によってもたらされた評判は、彼をいかなる事態にも立ち向かわせた」と書き、この改革のための努力は、六十七歳のアルジャーにとって、「もっとも建設的な」行為であった、と高く評価している。「すくなくとも一つの勝利を、彼は墓場まで持つて行った」というのである。

このエピソードを語るにあたって、メイズは、抗議集会のことを記憶しているマックス・セリグソンという人物を登場させたり、アルジャーが好んでおこなった「キリストの演説」と呼ばれるアジ演説のサワリの部分を引用したり、彼がパドローネの一味に襲われたときに現場に居合わせた目撃者の証言を紹介したりしている。いかにもまことしやかな書きっぷりであって、パドローネ制度の一件はほかの伝記作者たちによっても取りあげられているけれども、これもまたメイズのでっち上げであつたことは言うまでもない。だが、こうしたアルジャーの改革者ぶりを扱う章に「十字軍」というタイトルがついているだけでなく、貧しい子供たちのために戦う彼が「アマチュアの十字軍戦士クルセイダーの精神」をもっていた、という説明は、悪の存在しないアメリカ、「生命と自由と幸福の追求」が保証されている、例外としてのアメリカを夢みる大衆の心を強くゆさぶることになったと考えていい。パドローネ制度を追放したり、勇氣ある男、「キリストの演説」をやった男としてのアルジャーを強調したあと、「彼がその勝利をペイシエンス・スタイアズと分かち合いたいと願つたとしても不思議ではあるまい」とメイズが書いているのは、ただ単にセンチメンタルなハッピーエンディングを祝福するためではなかった。それは、かつての恋人の名前に言及することによって、「忍耐」というような美德の上に築きあげられたアメリカ共和国を守り切つた「十字軍戦士」としてのアルジャーのイメージを、読者の心にしっかりと植えつけることを目指していたのである。

メイズの「伝記」にはまた、アルジャーが合衆国大統領になることを夢みていたとも書かれている。ある日、「ホレイショ・アルジャーにとって、アメリカ合衆国大統領の職務は、可能性の域を越えたものではない」という友人の言葉を耳にして、突然、彼は目のまえに「新しい人生の展望」が開けるのを感じる。たしかに、「若者の友人、パトロンとしてのアルジャーは、ただ寛大というだけであつた」が、「アメリカの大統領になれば、彼は若者たちに、口では言えないことをしてやれるのだつた」とメイズは説明している。こうして、大統領になる可能性があるかもしれない、という友人の言葉のために、「何日も何週間も、彼の思考のプロセスは混乱のなかに投げこまれた」だけでな

く、この空想を「彼は舌で味わい、ひそかに微笑んだ」というのだが、ここまでくると、いくらパロディとしての「伝記」であつても、すこしやり過ぎではないか、と現代の読者は思うにちがいない。メイズ自身も、一九七八年に書いた告白のなかで、「わたしは、わたしの創造した人物の心に、いつかは合衆国大統領になるかもしれない、という幻想を抱かせた」と記して、反省した様子を見せているのである。

だが、読者としては、一九二〇年代のはじめに、自動車王ヘンリー・フォードを大統領候補にかつぎ出そうという動きがあつたことを忘れてはならない。一九二三年の夏、『コリアーズ・ウィークリー』がおこつた大統領についての世論調査によると、フォードは現職のウイリアム・ハーディングに八八、八六五対五一、〇〇〇で勝っていた。結局は実現にいたらなかったけれども、彼を大統領選挙に引っぱり出すことを画策する者たちが現われてもおかしくなかつた。フォードがホワイト・ハウスに入れば、アメリカ人を約束の土地へ連れて行くことのできる強力な指導者、モーゼやナポレオンやシーザーやアレキサンダーのような人物になるのではないか、と思われていた<sup>4)</sup>。とすれば、一九二八年の読者にとって、大統領になることを夢みているアルジャーのイメージは、案外すんなりと受け入れることができたのではないか。この「大統領」のイメージは、パドローネ制度と戦つた「十字軍戦士」のそれと重なり合つて、アルジャーをきわめてアメリカ的なヒーローに仕立てあげることになった、と考えたい。

しかも、メイズの「伝記」の翌年の一九二九年から大恐慌がはじまり、アメリカは不況のどん底に落ちこむことになるのだから、アメリカを脅かす悪に立ち向かう「十字軍戦士」的なヒーローの出現を待ちのぞむ大衆にとって、アルジャーがひそかに暖めていた「幻想」は一種抗いがたい魅力をもっているように思われたのではないか。事実、F・D・ローズヴェルト大統領がニューディール政策をひっさげて登場したのは一九三三年であつたが、この強力な大統領が「十字軍戦士」にほかならなかつたことは言うまでもない。いや、暴力によって平和と秩序をもたらす西部劇の原型となつた映画『ヴァージニアン』が一九二九年に製作されたことや、この同じ年にコミックス版の『ターザ

ン』が読者のまえに姿をあらわし、やがて一九三〇年代にはいつて、『ローン・レンジャー』や『スーパーマン』などが相ついで出現したことを思い出すならば、『アルジャー——ヒーローのいない伝記』は、そうした「スーパーヒーロー」の誕生する一連の作品を先取りしていた、という見方さえできるかもしれない。

結局のところ、メイズが「五流の想像力」を働かせて書きあげた「ヒーローのいない伝記」にも、アメリカ大衆好みのヒーローがやはり姿を見せている、と主張できるのではないか。この「伝記」から浮かびあがってくるアルジャーの姿は、実在の彼とはまったく無関係な、いわばきわめて神話的なアルジャーのそれであることは否定すべくもない。だが、彼自身のあずかり知らないこととはいえ、アルジャーはいつの間にか、アメリカ文化の重要な担い手の一人に仕立てあげられていた、と考えることもできるだろう。この「まったくのファンタジー」にすぎない一冊の書物を、あのジョージ・ワシントンの神話を作りあげることになったM・L・ウィームズの「伝記」の延長線上に置いてみたくなるゆえんである。

〔本論は「アメリカ大衆文化の世界」と題する拙稿の一部であることをお断わりしておく。〕

#### 注

- (1) Gary Scharnhorst with Jack Bales, *The Lost Life of Horatio Alger, Jr.* (Indiana Univ. Press, 1985). メイズの「伝記」の真偽などについては、この書物に負っていることがわめく大筋。
- (2) Herbert R. Mayes, *Alger: A Biography Without A Hero* (1928), Gilbert K. Westgard II, 1978). この本は著者の新しい序文がくくられている。
- (3) John A. Garraty, *The Nature of Biography* (Jonathan Cape, 1957), pp. 117-19.
- (4) Gary Scharnhorst and Jack Bales, *Horatio Alger, Jr.: An Annotated Bibliography of Comment and Criticism* (Scarecrow Press, 1981), pp. 64-67.
- (5) John Tebbel, *From Rags to Riches: Horatio Alger, Jr. and The American Dream* (Macmillan, 1963).
- (6) Ralph D. Gardner, *Horatio Alger, or The American Hero Era* ((1964), Arco, 1978).

- (7) Jack Bales, "Afterword" to Mayes, pp. 244-45.
- (8) Charles L. Sanford. *The Quest for Paradise: Europe and the American Moral Imagination* (Univ. of Illinois Press, 1961); David W. Noble, *The End of American History: Democracy, Capitalism, and the Metaphor of Two Worlds in Anglo-American Historical Writing, 1880-1980* (Univ. of Minnesota Press, 1985).
- (6) David E. Nye, *Henry Ford: "Ignorant Idealist"* (Kennikat Press, 1979), pp. 25-29.